

## 荒波乗り越え

## コバリキ (新潟市中央区)

■ 2 ■

# 石炭ストーブに活路

時代にともに  
にいがた企業  
Nilgata  
ヒストリー

建設業のコバリキ(新潟市中央区)の前身「小林力三商店」は、新潟と満州(現在の中国東北部)を結ぶ貨物船の代理店業で飛躍していく。襲名して創業者の父を継いだ2代目・小林力三氏の代には、満州国の建国で輸送量が増大していた。  
1941年の日米開戦後、太平洋側の航路が封じられる

と、新潟港は日満貿易の生命線となる。戦争の混乱の中、大陸との輸送ルートが集中したことで商店も繁忙を極めていた。  
長引く戦禍で食料に乏しかったため、満州からは大豆など食料が運び込まれ、新潟からは機械類や肥料などを送ったという。あふれる貨物をピストン輸送した。「終戦間際

## 敗戦で消滅 日満貿易転換



大連汽船の河北(かほく)丸。1934年ごろの就航時から大量の貨物を積んで日満航路を往復し、小林力三商店も一翼を担った

福祿の石炭ストーブ工場。まだ学生だった小林亨氏(後列左から3人目)が派遣された=1950年代、埼玉県川口市



燃料事業は大幅な縮小を迫られ、新社長の亨氏は難しいかじ取りを余儀なくされる。

45年、敗戦による満州国の消滅とともに日満ルートもその必要性を失い、商店と大陸との関係も途絶えた。商売はいや応なしに大転換を迫られる。  
「大陸へ渡っていたころが、力三が最も輝いていた時ではないか。戦後は燃え尽きた気持ちもあつたはず」と、2代目力三氏の孫が語った。  
大連汽船の河北丸(かほく丸)が就航した1934年ごろ、小林力三商店も一翼を担った。このころ、力三が最も輝いていた時ではないか。戦後は燃え尽きた気持ちもあつたはず」と、2代目力三氏の孫が語った。  
大連汽船の河北丸(かほく丸)が就航した1934年ごろ、小林力三商店も一翼を担った。このころ、力三が最も輝いていた時ではないか。戦後は燃え尽きた気持ちもあつたはず」と、2代目力三氏の孫が語った。  
大連汽船の河北丸(かほく丸)が就航した1934年ごろ、小林力三商店も一翼を担った。このころ、力三が最も輝いていた時ではないか。戦後は燃え尽きた気持ちもあつたはず」と、2代目力三氏の孫が語った。

には大豆の袋詰めも間に合わず裸で積んで来た」と、力三氏は新潟日報のインタビューで当時の切迫した状況を語っている。  
米軍は日本の海上輸送の寸断を図り、太平洋側や瀬戸内海の港湾地帯に機雷を投下。間もなく新潟港を含む日本海側も標的となった。終戦時には多くの船が沈没し、残った機雷による被害は戦後も続いた。  
山口県の炭鉱へ酒や土産を持って何度も通い詰めたという力三氏。徐々に関係を深める中で、石炭の調達が可能になる。戦後の復興期で石炭の需要は大きく、練炭の製造に加え、石炭の仕入れ販売に力を入れた。  
日本は高度経済成長期を迎えていた。国は石油をエネルギー政策の中心に据え、62年に国内の石油供給は石炭を抜いた。戦後復興を遂げつつあった。戦後復興を遂げつつあった。戦後復興を遂げつつあった。

現在のコバリキ社長、小林建氏(60)は述懐する。  
力三氏は、本業の海上輸送に加え、輸入石炭を活用した練炭の製造を手掛けていた。大連汽船は敗戦で事業停止食いつなぐために練炭事業を主軸とする方針を固め、石炭も全てを国産品に切り替える決断をした。  
山口県の炭鉱へ酒や土産を持って何度も通い詰めたという力三氏。徐々に関係を深める中で、石炭の調達が可能になる。戦後の復興期で石炭の需要は大きく、練炭の製造に加え、石炭の仕入れ販売に力を入れた。  
日本は高度経済成長期を迎えていた。国は石油をエネルギー政策の中心に据え、62年に国内の石油供給は石炭を抜いた。戦後復興を遂げつつあった。戦後復興を遂げつつあった。戦後復興を遂げつつあった。